

明治用水の計画者

都 築 弥 厚

都築弥厚は1765(明和2)年、碧海郡和泉村(現安城市和泉町)に生まれた。生家は豪農で、酒造業や新田の開発経営にも成功し、父祖以来蓄積された財による富裕の中で育てられた。弥厚は幼い頃から向学心が人一倍強く、常に努力を怠らない人であった。交際範囲も広く、学者や文人など多くの人とも接し、不可思議な魅力を持っていたと言われている。また、弥厚は47歳で根崎陣屋の代官に就任し、68歳まで長く地方行政に携わっている。これは土地の豪農というだけでなく、人間的にも人々から信頼されていたためだと思われる。

弥厚が用水の開削計画を決意したのは、弥厚の本業である酒造業や新田開発が順調に進んでいる1808(文化5)年頃だと伝えられている。計画を実現するには、まず現地測量することから始めなければならない。そこで、隣村である高棚村(現安城市高棚町)の和算家石川喜平に協力を求めたところ、彼は快諾し、門弟石川浅右衛門と共に5年の歳月をかけて測量図を完成させた。

1827(文政10)年10月、用水路の設計を完成した弥厚は、幕府勘定奉行に対し、長男弥四郎名義で「三河国碧海郡新開一件願書」を提出した。計画の内容は、矢作川上流西側の越戸村(現豊田市越戸町)付近で取入口を設け、延長約8里(32km)の水路を掘って、4,000町歩以上の新田開発をするというものであった。新田開発の費用は新開内仲間といわれた同志と都築一族が工面することにし、用水路開削の費用は幕府に拝借を願い出していた。

願書は幕府に取り上げられ、役人が1829(文政12)年と1832(天保3)年に実地検分に来ている。役人は水路開削予定地と新田開発予定地の村々を調査し、反対者の説得にも努めた。

幕府役人の検分後、1833(天保4)年4月に新田開発の一部許可が出された。しかしそれは、最初の計画の20分の1程度の約205町歩に対してのみであり、計画の中心である水路計画の許可は下りず、単なる新田開発となった。弥厚は計画実現への熱意を失わなかったが、一部許可が出されてからおよそ半年後の9月10日に病没し、その偉大な着想は成就しなかった。

その後、明治時代に入ってから弥厚の大志を「明治用水」として、岡本兵松と伊豫田与八郎が完成させた。

都築弥厚像

弥厚公園(安城市和泉町)

